

チャシの消滅期について

川 上 淳

—

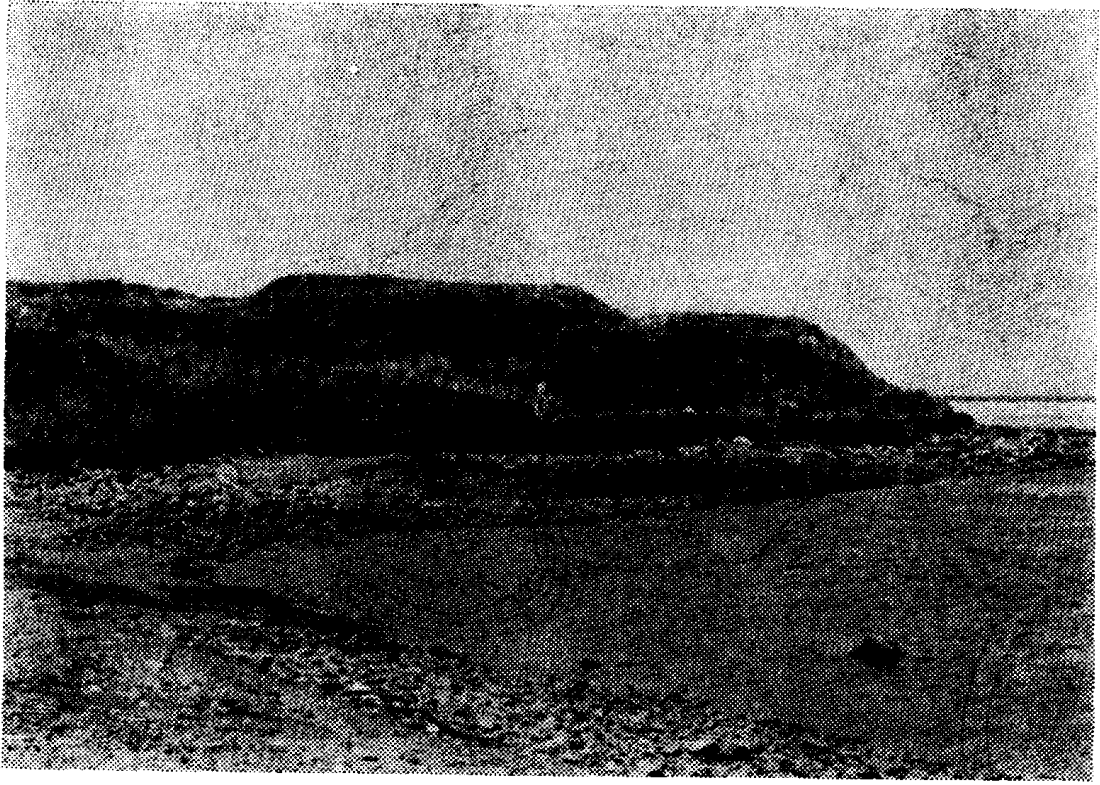
近世の北海道Ⅱ蝦夷地史において重要な視点は、幕藩制国家での位置づけとアイヌ史との関連であると思われる。これらは、大きくは国家史の課題とも関わり、支配・被支配・領土・民族などの多くの問題を含んでいる。

本稿では、考古学上で注目されているチャシについて、文献の上から考察を加えようとするものである。

チャシは、一六〇一八世紀ころ北海道・樺太・千島・東北部のアイヌの人々が構築・使用した砦であり、機能として「首長の居住地」⁽²⁾「垣籬に使用」⁽³⁾「生産のための場、祭場、談判の場」⁽⁴⁾「資源監視の場」⁽⁵⁾などがあり、戦闘用としてだけでなく多様な使用方法があったと考えられている。これらのチャシの総数は、北海道内では七百とも千とも言われており、筆者の住する根室市には三十ヶ所が現存していて、この内二十四ヶ所は「根室半島チャシ跡群」として、国の史跡に指定されている。考古学では分布調査・地形測量などの調査が行われているが、発掘調査の件数はまだ数えるほどである。⁽⁸⁾この時代の考古学上の遺跡は、チャシの他に「送り場」⁽⁹⁾があるが、これもほとんど調査されていない。

また、アイヌの人々は固有の文字を持たず、伝承による「記録」しかないので、この時代の歴史研究は、考古学と和人の記録した史料が中心とならざるを得ない。

チャシが構築・使用された時代は、アイヌ社会が幕藩制国家の経済的支配を受けながらも、首長層は村役人化されていな



ヲンネモトチャシ（根室半島チャシ跡群）写真

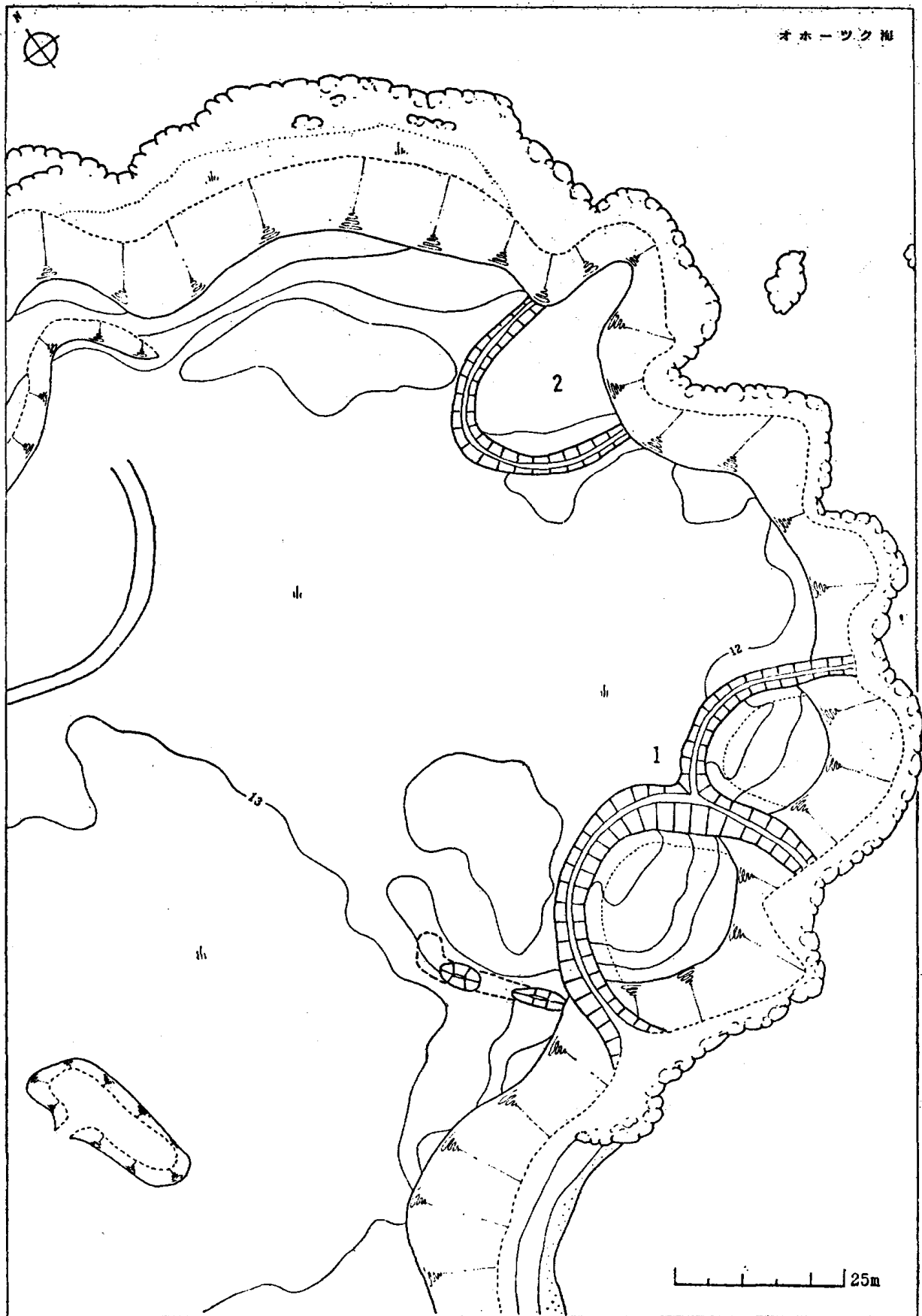
く、ある程度は独自の社会を形成していた。チャシの構築には多くの労働力が必要であり、これを指示する指導者の存在が想定される。また機能も前述したように砦としての使用であれば、他集団との争いが考えられ、日常時においてはコタンの中心的な構築物であったと考えられる。チャシはまさしく、アイヌ社会の象徴とも言える構築物であった。

筆者は以前、アイヌ社会の崩壊期について考察を加えたが、寛政元年のクナシリ・メナシアイヌの蜂起を以って独自のアイヌ社会の維持が困難となり、幕藩制国家に経済的にも政治的にも支配されると論じた。チャシの構築・使用はこうしたアイヌ社会のあり方と深くかかわっており、文献史料の上から、具体的な事実を浮び上らすことにより、アイヌ社会や幕藩制国家の一端を明らかにすることが出来ると考える。

本稿では、これら文献史料に現れるチャシの中で、最末期の構築・使用と消滅期について考察する。

二

チャシの消滅期については、『夷會列像附録⁽¹²⁾』の次の記述により、



ノツカマフ1・2号チャシ（根室半島チャシ跡群）平面図
 （北海道チャシ学会『北海道のチャシ集成図I』1985より）

寛政元年のアイヌ蜂起の時を最後にチャシは築造されなくなったというのが、定説化している。⁽¹³⁾ 同書のツキノエの項には、

數百人ノ惡賊類ヲ以テ相招キ既ニ深山ニ楯籠リ壘ヲ築キ隍ヲ掘リ大石ヲ運ヒ鹿砦ヲ結ヒ毒箭ヲ製シ矛槍ヲ拭ヒ

とあつて、寛政元年の蜂起の時、ツキノエが住んでいたクナシリ島のどこかに、チャシを築いたのである。また、同書のノチクサの項に、

一訥^ノ窳^チ孤^ク殺^サ此夷人ハ東部西^シ亞^ヤ没^モ箇^コ鄆^{タシ}ノ酋長也是亦精力衆ニ勝レ且ツ構智アリ東^メ夷^{ナシ} 夷人東方ヲ免^メ奈志ト云フ 莫亦此島ノ變ニ依テ

壘ヲ構フル所已ニ五箇所其黨近郷ヲ往來シテ徒賊ヲ集ムルト雖^モ此酋長辨才ヲ以テ利害ヲ説キタルカ故ニ將士速カニ其功ヲ遂ケシナリ

とあり、ノチクサはシャモコタン（現在の根室市豊里サンコタンと考えられる。）に住していた乙名（首長）で、ノツカマツプの惣乙名シヨニコの部下であつて、この記述では五ヶ所にチャシが造られたとあり、これはサンコタン周辺のチャシと考えられている。

しかしながら、筆者は次の史料により、もう少し後にまでチャシが造られていたことを付け加えたい。いずれも寛政十年の近藤重蔵の草案類の中にある。一つ目は「蝦夷地東西之進退并暴惡之夷人取計方之儀奉伺書付（草案）」⁽¹⁴⁾に

（前略）是迄アツケシ井クナシリ、エトロフ三場所之内、エコトイニ出逢候者、其實を不被奪取候者一人も無之、脇指を以て蝦夷を殺候も眼前五人ニ及候程ニ而、一嶋之者其暴ニ不堪、已ニ去年中尚又エトロフ蝦夷チャシと申蝦夷之壘^砦を築キ、一揉合仕候筈ニ申合も有之（後略）

とある。これはイコトイが人を殺したり、宝を奪つたりするので、イコトイに抵抗するためにエトロフ島で去年（寛政九年か）にチャシを築いたというもので、アイヌ同士争いの為にチャシを築いたということは興味深い。次に同じく寛政十年の「アツケシ惡黨蝦夷イコトイ儀取計方之儀ニ付奉伺書付（草案）」⁽¹⁵⁾にもほぼ同様のことが書かれている。

（前略）エトロフ一嶋之者其暴ニ不堪、已ニ去年中コシヨシアイノ・イクテント・エクニシノと申蝦夷三人頭取チャシと

申岩を築き、(後略)

チャシ構築者の三人の名前も記されている。また前述の「東蝦夷地アツケシ悪黨イコトイ風聞承繕候書付(草案)⁽¹⁶⁾」にも、同じく三人が「チャシを構」とある。これらのチャシ築造は、日常的な使用ではなく、非常時の一時的な築造・使用である。また、エトロフ島でのことであって、蝦夷地本島ではない点も注目される。

この寛政九年には、一般的にはチャシは使われなくなっていたようである。例えば、近藤重蔵は同じく「東蝦夷地アツケシ悪黨イコトイ風聞承繕候書付」の中で、

(前略) 其後イコトイ義自分とアツケシ之奥江立歸リ、同所沼之傍チャシ之禁江手廣く家作致、アツケシウタレ共呼寄せ、ラツコ捕候網を拵居申候、

本文メノコト申候ハ夷言妻妾ニ不限都而女之義ニ而、チャシと申候ハ岩之義、山之頂などニ拵へ置、今以所々古跡有之候(中略)

然處其後沼之離嶋ニ有之候辨天社已待ニ付、運上屋々も參詣仕候砌、イコトイを呼候へハ(中略) ユーヅルカ方へ參リ悪口申懸候へ共、取合不申候間、チャシ江歸宅仕候上、(後略)

とあって、前の方の記述ではイコトイがアツケシの奥の沼の傍らのチャシの麓に家を作ったと書かれ、このチャシの説明としては、岩を山頂などにつくり、所々に古跡があるとしていることは注目される。すなわちチャシそのものの使用ではなく、古跡となっていたのである。後の方の記述は、そのまま読めば、チャシに帰宅となっていて、使用されているかのように読めるが、前の文章の続きであるので、チャシのある場所の家に帰るという意味と考えられる。

寛政十年に近藤重蔵の蝦夷地調査隊に加わった木村謙次の『蝦夷日記』⁽¹⁷⁾のチャシに関する記述を拾いだしてみると、

- ① 此所ニ休ム 城⁽¹⁸⁾ チャシ有⁽¹⁸⁾
- ② ニキシヨロ 三里余 城⁽¹⁹⁾ チャシ有⁽¹⁹⁾
- ③ 右ウホリ山 左シシヤリキウシ 左城^(ア脱カ)チャシ⁽²⁰⁾リ
- ④ 運上屋ニ而昼食シテホホユエ 城⁽²¹⁾ チャシ有⁽²¹⁾
- ⑤ 登り降りてシモツ同道バラ山下畑を墾開す⁽²²⁾
- ⑥ チクシユイ⁽²³⁾ 城⁽²³⁾ チャシ有⁽²³⁾ 先年赤人來着之所アイニンカツフ岩出崎⁽²³⁾
- ⑦ 近藤君⁽²⁴⁾ チャシ行⁽²⁴⁾
- ⑧ 城⁽²⁵⁾ チャシ御見分⁽²⁵⁾
- ⑨ 金平 清助⁽²⁶⁾ チャシ泊⁽²⁶⁾
- ⑩ 金平 清助⁽²⁷⁾ チャシ来⁽²⁷⁾
- ⑪ 城⁽²⁸⁾ チャシ行⁽²⁸⁾ (中略) チャシ御野宿 但新造祠中ニ宿ス⁽²⁸⁾
- ⑫ 城⁽²⁹⁾ チャシ御帆^(マ)帰^(マ)之節沼中ニ而西風吹雪雨交リ皆々昼食なし⁽²⁹⁾

以上の記述からは、チャシの機能・形状は、城であるとの説明(①②③)があり、登る(⑤)ともあるが、具体的な形、使用方法は記されていない。また近藤重蔵がチャシに行き(⑦)、御見分(⑧)している。さらに、金平、清助がチャシに泊まっている(⑨)が、野宿であって、新しい祠があつて、そこで寝ている(⑪)。これらを総合すると、チャシはチャシコツ(コ

ツは跡)にはなっていないものの、時たま野宿程度に使用している様子が伺え、城や砦としては機能していないことがわかる。

以上から、寛政九年にはアッケシの惣乙名イコトイとエトロフアイヌの争いの中で、エトロフ島のコシヨシアイノ・イクセント・エクニシノの三人が、チャシを造った。寛政十年のアッケシにはチャシは残されていたが、チャシとしては使用していなかったということが解るのである。これらは従来の説を変えるものではないが、厳密にはチャシ築造の最下限は寛政元年ではなく寛政九年とすることが出来る。これが、アイヌ同士の極めて個人的で局部的な争いの為に造られ、その場所がエトロフ島であったことは、例え惣乙名に対する争いと位置付けることができて、寛政の蜂起の時のような、広域的なものではなかった。しかし、これがアイヌ同士の争いのために造られたことは注目してよいと思われる。これ以後、管見の範囲では、チャシを造って武力により戦うということは、和人に対しても、対ロシア人にも、さらにはアイヌ同士でもなくなり、それが個人的な争いであっても、チャシを造って戦うには、それだけの組織的な力が必要であるので、これが武力による組織的な争いの最後に位置づけることができるのではなからうか。このことはイコトイという強力な者に抵抗する手段として、チャシが造られたのであって、以後チャシが造られなかったのは、そのような力を持つ者が出現しなかったということでもある。

また、その場所が、松前から最も遠いエトロフ島であったということは、この場所がまだチャシを造る社会であったという点で、注目すべき事であると考えられる。

四

このようにみえてくると、チャシの構築とその消滅については、アイヌ社会のあり方と深く関連していることがわかる。寛政元年のアイヌ蜂起とその敗北は、クナシリ・子モロ(根室)の奥蝦夷地のアイヌ社会にとっては決定的とも言える影響を及ぼ

した。これ以後のこの地域の変遷を次に若干まとめてみよう。

寛政元年まで、クナシリ・キイタツプ・クスリ・アツケシ・ソウヤを請負っていたのは飛驒屋であったが、寛政元年のアイヌ蜂起により、松前藩は奥蝦夷地を藩直営とした。しかし、当時松前で最有力商人に成長していた阿部屋村山伝兵衛に実質的にこの地を請負わせた。阿部屋は利権争いに破れだす寛政八年五月までアツケシ・キイタツプ・クナシリ場所を請負っていた。⁽³⁰⁾

寛政三年には、幕府による御救交易が実施され、最上徳内・田辺安蔵・大塚唯一郎を普請役として、田辺はアツケシ・キイタツプ・クナシリで秋味の交易を、最上はエトロフ島・ウルップ島を調査した。この調査の目的は松平定信によれば、天明の御救交易が利欲の為であったのに対し、この度はアイヌに対する「公正」「御仁徳」に主眼があると、その違いを強調している。⁽³¹⁾ 寛政四年にも幕府による御救交易と蝦夷地調査は続けられたが、最上徳内らがカラフト調査を行っていたところ、子モロ(根室)にロシア使節ラクスマン一行が来航した。⁽³²⁾

寛政九年には、阿部屋村山伝兵衛にかわり、熊野屋菊地忠右衛門・小林屋宗九郎がクナシリ・子モロ・キイタツプの三場所を請負うこととなった。寛政十年には、近藤重藤・最上徳内・木村謙次らがエトロフまで調査に行き、翌十一年、幕府は東蝦夷地ウラカワからシレトコまでと付属の島々を仮直轄とした。詳細については『新北海道史』などに譲るが、寛政元年から十一年の間は、結果的には幕府直轄に至る過程であったと見ることができると、近藤重蔵らの調査により、前述のエトロフ島でのチャシ構築の事実が明らかになったのであり、まさに幕府直轄の直前のでき事であった。

クナシリ島での最後とみられるチャシ構築と寛政元年までのチャシ構築とは、本質的に異なる面を持っている。すなわち、寛政元年までコタン(村)の乙名(首長)を中心とした構築物であったのに対し、寛政九年のエトロフでのチャシ構築は、武力や戦闘を目的にはいるが、コタン対コタンとかアイヌ社会対和人社会の対立ではなく、イコトイの異常とも言える行動に対する防御的なチャシ構築であった。筆者は、このイコトイの行動もまた、幕藩制国家による蝦夷地支配が強化された産物で

あると考⁽⁸⁸⁾えている。この点からみると、寛政元年の前と後では、チャシ構築の目的は異なるが、やはりアイヌ社会の独自性や乙名の独自性と関連している点では共通していると言える。

以上、これまでの寛政年間がチャシの消滅期とする従来の説には異論はないが、新しい史料、それも寛政九年のエトロフ島のチャシ構築という点では、これまでの説を補強することにもなると考⁽⁸⁸⁾える。

また、チャシの構築・消滅にあたっては、再三繰り返すが、アイヌ社会の独自なあり方と、幕藩制国家の支配との関係が重要な鍵を握っている点を強調したい。

些細とも思われる事項について、拙論を展開したが、これによって、奥蝦夷地のアイヌ社会と、幕藩制国家の一端を考⁽⁸⁸⁾える一助になれば幸いである。

註 (1) 桜井清彦「チャシ」(『世界考古学事典』上 平凡社 一九七九)。

(2) 河野常吉「チャシ即ち蝦夷の砦」(『札幌博物学会会報』一一一 一九〇六)。

(3) 阿部正巳「北海道のチャシ」(『人類学雑誌』三三―三 一九一八)、同「北海道の土城」(『人類学雑誌』三四―一〇 一九一九)。

(4) 米村喜男衛「チャシの用法について」(『第八回日本人類学会民族学協会連合大会演題及び抄録』一九五三)、同「アイヌのチャシ」(『民間伝承』二四―四 一九六〇)。

(5) 松田猛「釧路地方におけるチャシユツ」(『釧路川流域の遺跡』 釧路川流域史研究会 一九七三)。

(6) 宇田川洋『アイヌ考古学』(教育社 一九八〇)。

(7) 藤本英夫「概説」(『日本城郭体系』第一卷 新人物往来社 一九八〇)。

(8) 最近の発掘調査例では、北海道平取町ユオイチャシ跡、ポロモイチャシ跡がある。(『ユオイチャシ跡・ポロモイチャシ跡・二風谷遺跡』北海道埋蔵文化財センター 一九八六)。

(9) 註(6)に同じ。

(10) 宮塚義人「チャシ構築に必要な時間」(前掲『日本城郭体系』第一卷所収)。

(11) 川上淳「中・近世アイヌ社会の首長について―乙名を中心として―」(『根室市博物館開設準備室紀要』第一号 同準備室 一九八六)、同「寛政年間前後の奥蝦夷地―支配と被支配―」(『根室市博物館開設準備室紀要』第二号 同準備室 一九八八)、同「奥蝦夷地(クナシリ・子モロ・アツケシ)の惣乙名ツキノエ・シヨンコ・イコトイについて―個別具体的なアイヌ史の試み―」(『根室市博物館開設準備室紀要』第三号 同準備室 一九八九)。

(12) 『夷酋列傳附録』は『東京人類学会雑誌』一七一―一九七(東京人類学会 一九〇二)所収。

(13) 北構保男『寛政国後蝦夷の乱』(根室・一九七四)二九頁には、「成立時代は遡るであろうけれど、最終的に手を加えたのは、寛政の乱の際であつたに違いない」としている。宇田川洋『アイヌ考古学』(前掲)五九頁には「アイヌの最後の乱といわれる寛政元年にもチャシは存在していたことが判るのである。その後、アイヌの大きな抵抗は無くなるが、それとともにチャシが構築されなくなったことも知ることができる。七八世紀のことである」とし、同じく宇田川洋「チャシ跡遺跡の地域研究例」(『考古学叢考』(中巻) 吉川弘文館 一九七八)では「また古記録に登場するチャシのうち。年代的に最後のものとして、この「国後の戦い」に関連するチャシが挙げられる(『夷酋列傳附録』)。一七八九年をもってその後、チャシは記録に登場しなくなるのである」としている。後藤秀彦「北海道のチャシ」(『北海道の研究』二 清文堂 一九八四)も方形塚を持ったチャシが根室半島に多く存在することに關連して、「これらは寛政元年前後の所産となり、チャシの編年の中では最末期に位置することとなる」とまとめている。

海保嶺夫「近世チャシの性格と成立―地域史と幕藩制研究の視座より―」(『幕藩制国家と北海道』三一書房 一九七八 二一―二二三頁)は『夷酋列傳附録』の記載と寛政三年の『東蝦夷地道中記』により、「寛政初期にもチャシは実用化されていたことが証明される。しかし、それ以降になると「かつてチャシにアイヌが住んだ」という類の史料はあるものの実際に使用されているとする史料は、管見の範囲では皆無となる」とし、寛政元々三年をチャシが造られた最後の時代としている。

(14) 東京大学史料編纂所編『大日本近世史料 近藤重蔵蝦夷地關係史料一』(東京大学出版会 一九八四)二四頁。

(15) 同七八頁。

(16) 同一一二頁以降。

(17) 木村謙次『蝦夷日記』(山崎榮作編『木村謙次集 上巻』一九八六)。

(18) 同八五頁。

(19) 同一一七頁。

(20) 同一七九頁。

- (21) 同一八六頁。
- (22) 同。
- (23) 同一九〇頁。
- (24) 同一九二頁。
- (25) 同一九五頁。
- (26) 同。
- (27) 同一九九頁。
- (28) 同二〇二頁。
- (29) 同。
- (30) 『新北海道史』第九卷、『松前町史』通説編第一卷上など。
- (31) 菊池勇夫「松平定信政権の蝦夷地対策」(『幕藩体制と蝦夷地』雄山閣 一九八四)。
- (32) 木崎良平「ラクスマンの根室滞在」(『根室市博物館開設準備室紀要』第二号 同準備室 一九八八)。
- (33) 註(11)に同じ。

(昭和五二年本学文学部歴史学科卒)
 (現根室市博物館開設準備室学芸員)